

<翻訳>

翻訳：ハリエット・マーティノウの自伝（3）

船木 恵子¹⁾

[解題]

本翻訳の底本に用いたテキストは *Harriet Martineau's Autobiography* volume 1, Cambridge University Press (2010) である。紀要の字数制限により「翻訳：ハリエット・マーティノウの自伝（3）」は原書の 61 頁から 91 頁までの翻訳である。1802 年にイングランドのノリッジで生まれたハリエット・マーティノウは 1832 年から 34 年までに出版した *Illustrations of Political Economy* シリーズの成功の後、作家として著名になるが、1855 年に健康が悪化し、死を予感して自伝をまとめた。しかしその後健康が回復したので自伝は出版されないままになっていた。最晩年にマーティノウはこの自伝を完結させるため、1855 年の続きをマリア・ウェストン・チャップマンに託して 1876 年に亡くなった。1877 年に 1855 年以降のチャップマンによる記述を加えた『ハリエット・マーティノウの自伝』が出版された。チャップマンは生前のマーティノウと契約を結び、マーティノウの書簡類その他自伝としての資料を譲り受け、生前のマーティノウの希望通りに自伝としての大著をまとめあげた。本翻訳は今回で 3 回目の紀要への投稿であるが、1818 年までの内容である。内容としては作家として活動を始める直前までのマーティノウの修業時代の葛藤の記録となっている²⁾。尚目次は 2023 年の総合研究所紀要の冒頭に翻訳がある。

ピリオド II

2 章（セクション II）（p.61～）

満足しつつ喜びを持って、いつもはっきり思い返すことができる魅力的な学校教育が始まったのは私が 11 歳の時でした。1813 年³⁾にノリッジのユニテリアン派の間で多くの話題になったのは、正統派の中でも異端の牧師だったアイザック・ペリー牧師がユニテリアン主義に改宗したことでした。ペリー氏はもともとチェリーレインチャペルの牧師で大変成功した男子校を長く維持してきた牧師でもありました。もちろん彼は（改宗によって）説教壇を失い、学校での立場のすべてを失いました。説教者としての彼はひどくつまらない説教をし、また男子校の教師としては単純で彼らに騙されやすいところがありました。不思議なことにはこうしたいたずらっ子たちに翻弄されたにも

¹⁾ 武蔵大学 総合研究機構 研究員

²⁾ 本翻訳は科学研究費助成「ヴィクトリア時代の合理主義的フェミニズム：ユニテリアン・ウーマンの社会改良思想」(20K01581) の支援を受けた研究内容に基づく翻訳作業である。

³⁾ 1812 年はいわゆる「ユニテリアン寛容法」の年である。寛容法から除外されていたユニテリアンはこれにより 1813 年には公認派を形成することができた。

関わらず、彼の学校がこれほど長く完全にも続いたということでした。しかし彼は女子校の校長としては紳士的で、その高潔さが仕事ぶりに十分に反映されていました。そして教えられる子供たちからはとても愛され、真から祝福を受けていました—私の両親が（子供たちの教育環境を）変えることについて考えていたとき、レイチエルと私は近づく変化を確かに予感していました。というのも、ある日私たちは、このペリー氏と私たちの牧師のマッジ氏が角を曲がる前に、上の階の窓に飛んでいって彼らを一目見たからでした。それが私が初めて見た黒いコートと灰色のパンタロン、白髪交じりの髪、そして人差し指を指さしたりシーソーのように動かしたりする様子だったわけですが、その後私はそれをすっかり見慣れてしまったのでした。

(p.62) 学校に行った最初の日、私たちはひどく緊張していました。そこはとても大きな白塗りの壁のアーチ型の部屋で、そこには先生の演壇がありました。そしてその下には、赤く塗られた木の机とベンチが並んでおり、いたずらっ子たちのいたずら書きがいたるところに彫られていました。しばらくの間は何人かの良い子の少年たちが居残っていましたが、女の子たちは最前列の机に座りふりかえって男の子の姿を見ることはできませんでした。それでも少年たちの徹底した勉強のやり方は私たちに影響を広げました。私たちはまるで連動したかのように心から彼らと一緒に行動したのです。私は最初の朝の授業時間の長さにやや威圧されたことを覚えています - 9時から12時まで - そして午後にも同じように張り詰めた時間を過ごし、毎日二回の緊張の時間を過ごしました。でもほんの数日で、私はその喜びすべてに夢中になり、新しい幸福の状態が始まったのでした。それ以来今に至るまで、このように深く、徹底的に進歩の感覚を感じたことはありませんでした。私が覚えている限りでは、私たちは授業ではほぼ落第することはありませんでした。トラブルはほとんどなくて、私たちはすぐに仲良くなりました。これは、先生の教え方がいかに良かったかを示しています。私たちは古いイートン校の文法の教育システムからラテン語を学びました。その教育があったからこそラテン語、散文、詩などを一日に4時間も暗唱したり繰り返したりを終日おこなった日（土曜日）を思い出すのです。レイチエルと私の他に、2人の女子がクラスにいました。そして、2年が終わる前には、ラテン語でいくつかの古典を楽しむ能力を確実に獲得したのでした。キケロ、ウェルギリウス、そしてホラティウスの一部などが私たちの主な読書でしたし、その後私はタキトゥスに大きな喜びを感じました。(p.63) それは私には純粹な理解と喜びだったと思います、なぜなら、私はラテン語で考える習慣がつき、英語の詩と同じようにラテン語で眠りにつくことに何らかの喜びを感じていました。さらに、私たちは詩作りの試験を頑張りましたが、それで不名誉な評価を受けたことは一度も覚えていませんし、確かに時々かなり賞賛を得ました。ペリー氏がいなくなり、私たちがグラマースクールの先生の一人であるバンファーザー氏のもとでラテン語を教えられるようになったとき、ある日、B氏（バンファーザー氏）はポケットから小さな本を取り出し、私たちにそこからラテン語の詩の一説を翻訳するように言いました。私の翻訳部分では単語一つ（antiquaをannosaとしてしまった）を除いて（解答の）原文と全く同じでした。このようなテストは、私たちが本当によく教育され、その達成度が順調に進んでいたことを示していると思います。フランス語も、文法を徹底的に学び、発音も戦時中⁴⁾のほとんどの学校ほど乱暴ではありませんでした。ほとんどの授業時間にフランス人女性が授業に関わっていたため、ペリー氏は非常に几帳面な作文

を得意としていたのだと思います。そして何よりも私たちを神秘の世界へと導いていくことを楽しんでいました。その方法論と神秘性は礼拝堂での説教よりも学校の授業にこそふさわしいものでした。彼の説教は恐ろしく退屈でしたが、授業は非常に興味深く有益でした。彼の説教で私たちが唯一興味を持てたのは、まず彼がお馴染みの人差し指を操り、私たちがよく知っている知識の足場の上に主題を構築していく時でした。まず命題があり (p.64) 次に理由と規則、そして古代と現代の例、堅信（式）があり、そして最後に結論がありました。これは福音を説く奇妙な方法かもしれません（すべてが使徒的というわけではないのですが）少女たちの混沌とした思考に何らかの秩序をもたらす素晴らしい方法でした。私が覚えている私たちの経験の一つが、このことを非常によく表しています。ある日詩作への熱意に駆られて、私たちは一度だけ自分たちでテーマを決めさせてほしいと先生に頼みました。クラスでは事前にテーマを決めていたからです。もちろん許可は下りて私たちは「音楽について」書きたいと口走りました。ペリー先生は、これはテーマと呼ぶにははつきりしないねと指摘しました。詩篇の用途、特定の状況における旋律の効果、軍楽、愛国歌などというようにいろいろな具体的なテーマがあり、先生はこれほど大きなテーマを限定なしに扱うと、曖昧さが生じるのではないかと懸念していました。しかし私たちは自分たちのやりたいことに固執していたので、先生は結局それを許してくれました。結果は容易に予想できました。私たちの全員がまるで雲の上を漂っているかのように曖昧模糊としていて、どれほど思いめぐらしていたか想像に難くありません。私たちは、自分の感受性と雄弁さにすっかり酔いしれてしまってペリー先生の机に向かいましたが、ひどく落胆して机を後にしました。次々とテーマが読み上げられましたが、命題に至ることに一致する者は一人もいませんでした。私たちの愚かさはますます明らかになりました。そして最後に先生が少しだけ、穏やかで敬意を込めて述べた言葉は、私たちが得た教訓を印象付けるものでした。先生は人差し指を立てて「お分かりでしょう、皆さん」と言い、私たちはすべてを理解しました。それ以来、私たちはテーマの選択において、先生から導かれ、あるいは指示されることに感謝するようになりました。(p.65) 作文は私の一番好きな練習でした。そして、テーマを与えられることによって評価を得たと信じています。ペリー氏がそう言ったのは 1834 年、私が『経済学例解⁵⁾』を出版し終えたばかりの頃で、作文の師である彼に感謝の意を表す機会を得た時のことでした。そしておそらく、それが私の心を作文の方向に明確に向かわせたきっかけだったのでしょうか。長年連絡を取っていなかった老師との出会いは本当に嬉しかった。でもそれが最後の再会でした。私の記憶が正しければ、アメリカに向けて出航する前夜に先生と会ったはずでした。そして、私が帰国する前に彼は亡くなったのでした。

作文に次いで、算数は私の一番好きな勉強だったと思います。数字を扱うことの喜びは私にとって説明のつかないものです。感覚の喜びと同じくらいなのです。私は遊びの時間には石板に計算を書き連ね、それを洗い流し、また石板に書き連ねることに時間を費やしていました。それでも実の

⁴⁾ 第二次百年戦争の末期のナポレオン戦争は 1815 年に終結した。以後フランスとイギリスの闘いはおこなわれていない。

⁵⁾ *Illustrations of Political Economy* (1832-34) マーティノウの代表作のシリーズ。経済理論を寓話化した。

ところ、楽しい授業ばかりでした。それが私の知的生活への入り口でした。知的生活の中で、私はその時も、そしてその後も、道徳的な苦しみからの逃避先と、尽きることのない道徳的な力と喜びの泉をそこに見つけたのでした。

でも当時あの楽しい学校にいてさえも、私は困難から逃れられる場所が必要だと感じていました。公正で親切な先生の保護のもとにあったその学校でさえ、他の場所と同じように、正義への情熱が失望に終わることを実感しました。同級生の何人かが、学校からレイチェルと私に対して、でたらめな告発をしてきました。ペリー夫人に、そして疑いなくペリー氏も、私たちが卑劣な策略を企てる信じていることに私たちはひどく落胆しました。(p.66) 私たちは無実を証明できず、まず罪を犯したとされ、次にそれを隠すために嘘をついたとされたという事実を受け入れなければなりませんでした。私は、反証が不可能ということで、無実を主張している人を有罪とは生涯決して信じないとどれほど強くこの時決意したことでしょう。——もう一つ私に大きな印象を与えた出来事がありました。それは少年たちが卒業に向かう前に起きた出来事でした。そしてその後は私たち女子(16人)が自分たちだけでいられるときに、私はとても嬉しくなったのでした。

ある日、ペリー先生は、しばらく引き留められると思われる訪問客に呼び出されました。そのような場合学校は案内係の事務員に任せられました。その案内係の机は広い部屋の奥にありました。この日は特に男子生徒が女子生徒に授業を受けさせませんでした。どういうわけか、彼らは私たちの前でとんでもなく馬鹿げた仮面をかぶり、私たちが思わず笑ってしまうようなことを言い、まるで子供じみた下院議員のような声色で、優しく「ワンワン」と挨拶したり、「クーケー」と鳴いたり、「ミー」と鳴いたりしていましたが、遠くにいる案内係には聞こえないようにしていました。私たち女子生徒は笑いながらも本当は腹が立っていました。授業を受けたかったからです。誰かが提案し、案内係に苦情を申し立てるべきだと全員一致で可決されました。私は一番年下だったと思います。そして他の生徒から苦情を伝えるように頼まれたのも覚えています。私は全く無邪気に頼まれた通りにしました。その結果は——本当にぞっとする話となって——教室に再び戻るのがまるで試練の門をくぐり抜けるようなものとなりました。ああ！あのシューという音！「シーッ、告げ口だ、告げ口だ！」と皆がわたしに言い出しました。(p.67) しかし、最後にはさらにひどいことが起こりました。私を送りだした女子生徒は、私に対する仕打ちは当然で、皆は告げ口など一切していないと言ったのです。レイチェルでさえ私に反対しました。一体私は本当に告げ口屋という恐ろしい存在だったのでしょうか？ そんなつもりはまったくなかったのです。それでもそうなってしまったのです！ペリー先生が戻ってくると、階下から案内係の声が聞こえました——「先生！」そして、一年生全員の名前とともに、一部始終が告げられました。ペリー先生は普段は温厚な人なのですが、激怒するとなると徹底的に激怒しました。顔は白髪と同じくらい青白くなり、不吉な人差し指が震えました。そして、この時ほど激怒したことはありませんでした。J.D.は普段は「正しい」からという理由で、放課後ギリシャ語を30行学ぶことを命じられました（彼はその後間もなく、愛されながら亡くなりました）。彼の弟であるW.D.は、それほど「正しい」性格ではなかつたので50行命じられました。他にも30行から50行命じられた者が何人かいました。そしてR.S.（今では、ノリッジの老舗宿屋の主人になったと思います）にはこう言いました。「R.S.はいつも悪さで先頭

に立っていたが、今こそその報いを受けなければならないぞ、R.S.は家に帰る前にギリシャ語を70行学ばなければならぬ」と。私はあの少年たちからあらゆる方法でお仕置きを買い取る知恵があったらどれほど嬉しかったことでしょう！彼らは彼らが罰せられるのを見ることを私が楽しんでいると思ったに違ひありません。でも私は、彼らの運命に、そしてごくわずかな悪意で一瞬にして非常に走る人がいるのだという事実に、ほとんど同じくらい恐怖を感じたのでした。

ペリー氏がノリッチを去る前に起こったある出来事は、当時私を驚かせました。そして今でもおそらくもっと驚かされているのかもしれません。それは子供の道徳心があまりにも抑圧されると、子供の良心がいかに無力になるかを示しているからです。(p.68) 学校では、私たちが知る限りすべてが順調に進んでいました。ある日、ペリー氏が訪ねてきて、父か母と個人的に面会したいと申し出ました。母とペリー氏は応接室で長々と話していたため、夕食は30分以上遅れ、その間、私は不安で吐き気がしてきました。私たちが何か悪いことをして、ペリー氏が私たちのことに苦情を言いに来たのだろうと信じて私は全く疑いを持ちませんでした。これが私の常でした。私はいつもそうでした。正しいか間違っているかに関わらず、非難されることに慣れ、それに屈してしまうことに慣れていたので、善惡に対する明確な感覚が失われていました。私は心の底ではいつも自分が間違っていると結論づけていたのだと思います。今回の場合、それが一体何なのか全く分からなかつたとしても、それは何の問題にもなりませんでした。母が現れたとき、彼女はとても厳肅な様子でした。父も兄弟も皆その雰囲気が広がって夕食は静かで陰鬱でした。母は昔ながらのような情景を少し好んでいました。そして今、私たちは忘れられないほどの場面を経験しました！「ねえ」と、デザートがテーブルに並び、召使いがいなくなったりとき、母は父に言いました。「ペリーさんがいらっしゃいました」「そうなんです、いい人なんですよ」「とても大切なことをおっしゃるんです。レイチェルとハリエットについておっしゃるんです」私はナプキンの縁をつまんでいましたが、今や私の心が沈んで気を失いそうになりました。「ああ、いよいよ来た」と、何か大きな不正の知らせを予想して思いました。母は、とても厳肅な口調で続けました。「ペリー先生は、レイチェルとハリエットに欠点を見つけたことは一度もないとおっしゃりました。もしそんな女の子たちで学校がいっぱいだったら、私はこの世で一番幸せな先生になるでしょうって。」それに対する私の反発はすさまじいものでした。(p.69) 祝福の言葉が殺到する中、私はひどく泣いたのを覚えています。でも私自身の善惡の判断がこれ以上役に立たないなんて、なんて自分というものを見つめなおす道徳的な状態だったことでしょう！この話には独自の教訓があるのです。

しかしながら、ペリー先生がその後話してくれたことは、実に悲惨なものでした。彼は世慣れした人ではなく、奥様も経営者らしくなく、借金と困窮に陥っていました。友人たちが借金を返済し(父は多額の借金を肩代わりしました)、結局イプスウィッチへ引っ越しました。幼い頃の私の悲しみの中で、最も辛いのは、彼らの旅立ちだったと思います。私たちの二年間の学校生活は、振り返るとまるで一生のことのようでした。そして今でも、私の人生を振り返る中で、それは不釣り合いなほど大きな割合を占めています。それほどまでに、その重要性は計り知れないものです。私たちが先生に別れを告げなければならない時、私は生徒たちの感謝と祝福の言葉を伝えるよう指名されました。しかし、私は涙で立ち直れず、先生は私たちの悲しみを最大の賛辞として受け止めてください

さいました。先生は生徒たちのところを回り、優しく厳肅な言葉で私たち全員と握手し、悲しみに暮れる私たちを家路へと送りました。これは私の人生のある時期の終わりのように見えましたが、実際には私の人生が全過程を通じて何よりも知的 existence であり続けた、その主要な段階のまさに始まりでした。

彼が去った後、私がプリストルに送られる前までの私たちの生活は次のようなものでした。私たちはラテン語とフランス語を、また私は音楽を、ある先生から学びました。そして、家族で歴史、伝記、批評文学の読み聞かせをたくさんおこないました。私がこの時おこなっていた膨大な量の針仕事と楽譜の写しは、今でも私にとって驚異的なものです。同時に並外れた肉体的な怠惰も同様のものでした。朝起きるのが辛かったこと、毎日の散歩やあらゆる訪問嫌い、そして私がいつも愛していた単調さを少しでも中断することが嫌だったことなどは、今ではほとんど信じ難いことのように思えます。(p.70) (それ以後は私の習慣は活発になってきました) しかし、私の健康状態は悪くて心は落ち着きませんでした。それは憂鬱で葛藤に満ちた生活でした。私がこれ以上ないほど不愉快な人間だったことは間違いありません。難聴という大きな災難が今、私を襲おうとしていました。それが若さからの不屈の精神を保つにはそれで十分だったでしょう。ただし絶え間ない消化不良、倦怠感、そして筋力の低下といった私にとって人生の重荷となっているものが無ければのことなのでしたが。宗教は私にとってはある程度の慰めとなり、書物や音楽は私の大きな資源となりましたが、それらは大きな不幸をもたらす余地がありました。私が一日で最も愛した時間はカーテンを開める時間でした。デザートを食べずに、冬の間、居間で暖炉の火明かりでシェイクスピアを読みました。母は、このような家庭のマナー違反を寛大にも許してくれました。その後、私が新聞を熱心に読むようになった時にも同じように許してくれました。それ以来、私はこの寛容さに何度も感謝しています。夕食の間ずっと椅子の上に新聞を置いておき、祈祷が唱えられるとすぐに持ち去ってしまう自分の行儀の悪さ、そして何が起きようともお茶が注がれるまではシェイクスピアの教えを守り通すという自分の行儀の悪さを自覚していました。しかし、私はこうした自分への甘やかしを断ち切ることはできず、落ち着かないままそれを楽しみ続けました。私たちの時代、最盛期の新聞はグローブ紙で政治経済学を教え、公共問題を経済学の観点から捉えていました。私が政治経済学に惹かれたのは、これが初めてではありませんでした(その名前を知ったのは5、6年後のことでした) というのもペリー先生のところで地理の教科書(何だったか忘れましたが)の、国債と基金の各部門について扱った部分に夢中になったのを覚えているからです。(p.71) それは兄弟や他の仲間たちの理解不能な嘲笑によって私の記憶に焼き付いていました。彼らは私に、見せかけの敬意を込めて国債の状況を説明するよう私に頼んだり、クリスマスゲームの罰ゲームとして、出席者全員に積立金の運用を理解させるように課したりしたのです。20年後に私は15歳になる前にマルサス氏の名前を聞き飽きたのです、と言った時の、マルサス氏の面白がりを今でも覚えています。彼の著作は、当時もその後も、本の中身さえ見たことのない人々によって、非常に雄弁かつ力強く語られてきました。彼と彼のいわゆる教義に対する反対意見を、私は数多く耳にし、読んだように思います。ところが、後になって調べてみたところ、彼の本を読んだという人は一人も見つからなかつたのです。微力で苦戦していた私が初めて掲載された、ユニテリアンの定期刊行物『マンスリー・

レポジトリ』誌に、トマス・ヌーン・タルフォードという若者が、この頃、著作活動に初めて挑戦していました。彼の初期の論文の中に「マルサスの体系について」というものがあったと記憶していますが、これは実際のマルサスやその体系とは全く関係がなく、長年の取り組みを感傷的に擁護する内容でした。この本はごく若い人たちに大いに賞賛されましたが、私自身はそうではありませんでした。というのも、私の好みには少々甘美すぎたからです。でも私の家族の何人かはそれを読み、しばらくそれを糧に生きていました。しかし、この本はマルサスの主張について私を誤解させ、ずっと後になって彼に話したように、マルサスの名前にうんざりさせられる原因になりました。しかしそれにもかかわらず、私は知らず知らずのうちに政治経済学者になりつつあると同時に、当時はミルトンとシェイクスピアの歩く索引(Concordance)のようなものでもありました。(p.72)

自分が多かれ少なかれ耳が聞こえないことを初めてはっきりと自覚したのは、ペリー先生の教室にいた時でした。12歳くらいの頃です。当時はごく軽度で、ほとんど気づかない程度の難聴でした。自覚していたのはただこれだけです。先ほど述べた、大きな丸天井の教室では、教室と先生の机や暖炉の間に大きな空間があり、私は授業中に席を譲ってもらはず、いつも一番前の席に座りたいとおもっていました。なぜなら先生にやや近いからです。そこなら先生の声が遠くから聞こえてくるとは限らなかったからです。ペリー先生が引っ越して、私たちがもっと狭い教室に移動した時、私は再び他の生徒と同じように席を譲りました。当時、聴覚に関して他に何か問題があったことは覚えていません。確かに、礼拝堂や、あらゆる人前でのスピーチ(広々としたセント・アンドリュース・ホールでのウィルバーフォースの演説を覚えています)、そしてどこにいても一般的な会話は、完璧に聞こえました。しかし、16歳になる前に、それは私にとって非常にはっきりしたものになり、とても不便で、そしてとても苦痛なものになりました。かつて私は聴覚のような主要な感覚の喪失という、陰鬱な物語のすべてを書き留めようかと考えたことがあります。そして今、もしそれによって十分な利益が得られるなら、その苦痛を他人にも自分自身にも与えることをためらわないのですが、実際には、そんなことはあり得ないと思っています。確かに、苦しんでいる人々は、十分な、あるいは知的な同情さえも得ることは稀なものです。しかし、その悲惨さを詳しく説明したとしても、実際に同情を得られるとは限らないのです。1834年に出版した「聴覚障害者への手紙」で私が述べたことは、少しでも同情できる人にとって、ここで私が言えることと同じくらい役立つかもしれません。だから、(p.73) 音の世界から徐々に排除されることに伴う日々の、そして時間ごとの試練について、今私は詳細な記述はしないのです。

しかしながら、いくつかの提案と結論を提示するのは適切でしょう。私は、家庭や普通の学校で、聴覚障害児の教育がうまく行われているのを今まで見たことがありません。親や教師は決して口頭でのやり取りが他の方法よりもはるかに多くのことを学ぶことができるということを考慮していないようです。そしてこの考慮が欠如しているため彼らは、聴覚障害の生徒が感覚、行儀作法、そして情報というよりは本能の問題のように思えるほど日常的な事柄に関する知識に欠けているということに、手遅れになってから気づいて愕然とします。また、聴覚障害の子供は、まるくて問題を起こしやすく、利己的で、自己中心的であることが多いです。彼らに伴う嫌悪感は親の無知が子供に与えた罪なのです。これらの最悪のケースは、生まれつきあるいは非常に幼い頃から聴覚障害

である子供たちに見られます。そして、私がそれから逃れられたのは、主に、聴力が低下する前にかなり高度な教育を受けていたからです。私のような場合、よくある弊害（はるかに軽微なものですが）は、聴覚障害者が詮索好きになり、話されたことをすべて知り尽くし、世間一般の退屈な人間になってしまうことです。私は長兄の優しい言葉によって救われました（あるいは救われる助けを得ました）。（もう少しそのような言葉が周りにあれば、どれほど救われたことでしょうか？）長兄は、ある年配の独身婦人（当時は田舎の貴族のような風貌でした）と食事を共にしました。彼女は急速に、しかも本人の意志に反してひどく耳が遠くなっています。最後の瞬間まで自分ではその事実を無視しようとしていました。その晩餐会で、この婦人は旧知のノリッチのウィリアム・ティラーの隣に座りました。（p.74）彼は女性との接し方をあまりよく知りませんでした（名誉のために言っておきますが、盲目の母を除いては）。そしてこのN嬢がティラー氏に対して皆の言うことをすべて彼女に話すようにからかいながら強いたので、ついに彼はすっかり気難しくなって年配の婦人に対して失礼な態度を取ってしまいました。兄は優しい声で、N嬢のことを思い出しながら、そこにいる皆と同じように顔を赤らめ、N嬢のことを思い出した、と私に言った。そして、もし私がいつか彼女みたいに耳が聞こえなくなったとしても、あんなに迷惑で滑稽なことをしているところを見たくない、と言ったのです。この言葉が私の決して破らなかった決意を支えてくれたのです。それは、人がしゃべっている内容を決して聞き返さない、という決意です。親切な忠告や辛辣な忠告、あらゆる種類の挑発の中でも、私はこの決意を貫き通しました。私は聞こえないことを理解していました。今も昔も思ってきたように聴覚障害の者が何が聞く価値があり、何が聞く価値がないかを判断し聞き取るのは不可能だと思っていました。そして、友人ならば人に邪魔されなければ、大切なこと、本当に聞く価値のあることは常に教えてくれるだろうと信頼しています。

ある感覚に障害を持つ人々について、私がこれまで一度も気づかれたことのない重要な真実が一つあります。そして、その障害に苦しむ人々以外にこの事実に気づく人がいるのかどうか私は非常に疑っています。私たち障害者はその辛苦に対して多くの同情を受けます。しかし、辛苦は（私自身の経験から判断すると）障害によってもたらされる疲労に比べれば、はるかに小さな害悪です。確かに、私の場合、五感のうち三つの感覚⁶⁾が欠如していることが、この状況を非常に深刻なものにしています。しかし、單に目が見えなかつたり、耳が聞こえなかつたりするだけの人も、私が対処するのが最も困難だと感じた人生の劳苦を多少なりとも感じているに違いありません。（p.75）人は一般に、自然の中でじっと座っているだけで、娯楽や気晴らし（厳密な意味では、フランス語で言えば *distracted* 気を紛らわせる）をして、「休息と同じくらい良い仕事の変化」を見つけられます。でも私は、人生の大半を、知的な観点からは抽象的あるいは落ち着きのない思考から、また道徳的な観点からは物思いにふけることからの代替として、印象や影響を探し求めてきました。どちらの選択肢にも疲労が伴うことは一度示唆されれば容易に想像できます。そして思慮深い人なら、私のように心身の劳苦に疲れ果てた者には、公平を期すために、気質の欠点、短気さや神経の弱さ、心の狭量さ、そして共感力の欠如をどれほど大きく考慮しなければならないかすぐに理解するで

⁶⁾ マーティノウは聴覚、味覚、嗅覚が欠如していた。

しょう。私はこの原因で、寿命の二倍にも及ぶかもしれない疲労に耐えてきました。そして、この件について私は説明を求められるまで、誰からも同情を得ることがありませんでした。忘れてはならないのは、この労働からは、眠っている間以外に休息はないということです。聞くことも見ることも、努力してのみ可能であり、あるいは失われた感覚を他の感覚で補わなければならない私たちにとって、人生は長く厳しく休みのない労働日なのです。五感のうち三つが欠如していると、楽しく暮らすことは非常に困難になり、生活条件は実に厳しいものとなります。もしこのことについて理解していただけたなら、この説明が重荷から解放されることはないけれど、理解していただけることで励まされる多くの人々の安心を得るであろうことを願っています。

もう一つ提案したいのは、健常者が、聴覚障害者の事情を代弁するべきではないということです。(p.76) 同情は惜しまない方がいいでしょう。しかし、判断できない状況に高圧的に介入してはいけません。実際、病状が悪化している人の家族は真実を直視したがらず自らの弱さと不安を和らげるために、患者にひどい苦痛を与えがちです。私の家族は、私を不幸から救うためならどんな犠牲も払ったでしょう。でも彼らの接し方によって事態はひどく悪化しました。まず、そして長い間、彼らはすべて私のせいだと主張し続けました。私があまりにもほんやりしていたから、人の話に全く耳を傾けなかったから、こうして聞くべきだ、ああして聞くべきだ、などと言って。そして（私の心が張り裂けそうになっている時でも）彼らは私に「聞こうとしない人ほど耳が遠い人はいない」と言いました。それがどうにもならなくなったら、彼らはどうにかしなければならなかつたことをしなかつたからだと私を責めました。つまり、言われたことをすべて彼らに尋ね、彼らのやり方で何とかしようとしたからだ、そうすればすべてうまくいったはずだったと言うのです。しかし結局のところ、そうしたことは私にとって非常に役に立ちました。それは、自分の問題を自分で解決しなければならないことを教えてくれたからです。そしてそのことは他人の意見に頼っていた私にとってあり得る破滅からの救済でした。これまでのように無力に漂流する代わりに私は勇気を奮い起こし、自分の運命に勇敢に立ち向かおうとしました。そしてついにしっかりと踏みとどまれる岩にたどり着きました。私はここに積極性があるのだと感じました。そして、私の中に積極的精神がかき立てられ、途中で多くの沈没と失敗を経験しながらも、確実な成功へとそれは私を突き動かしました。その過程で、私は自分の感情をこのように制御しました。私は誓いを立てるには若すぎましたが、実際はまさに誓いを立てる年齢でした——そして私はこの病状について我慢するという誓いを立てたのでした。——この病状による苦痛の瞬間には、微笑み続けること。(p.77) そして、この病状によるいかなる結果にも決して腹を立てないこと——公の礼拝（教区の礼拝）を失うこと（当時は考え得る最大の辛苦だった）から、私が必ずや陥るであろうと予見していたトランペットの使用によって帽子の縁が台無しになることまで。当時の私のような気質にとって、聴覚喪失は「死に至らせるか、治癒するか」という、これほどまでに心配で、途切れることなく、これほどまでに屈辱的で、これほどまでに孤独な苦痛でもありました。やがて、それは（若い頃の私の気質に比べれば）治療薬のように効いてきましたが、治癒するまでには非常に長い時間がかかりました。

15歳の時には、症状の治療が明らかになるどころか、全く感じられなかつたため、両親は医師の勧めにより、私をかなり長い間家から出すことに決めました。環境と物事を徹底的に長期間変え

ることで、私の健康、神経、そして気質が改善されることを期待したのです。しかし人生の新たな章に入る前に、この個人的な病気の治療についてもう一つ述べなければなりません。子供の頃、若い年頃の遠縁の女性がいました。彼女は田舎に住んでいて、市場のある日にはノリッチへ来て時折私たちの家を訪ねてきました。彼女は幼少期に耳が聞こえなくなり、ひどい難聴でした。そして、その不幸はきちんと治療されていないことでした。正直に言うと彼女は決して快い人ではありませんでした。しかし私自身耳が聞こえなくなるなどとは夢にも思わなかった以前から、彼女の耳が聞こえないことのせいで、よく言われていたのです。窓辺の子供が誰かから彼女が通り過ぎると告げられると、いらだちの叫び声が上がりました。彼女が階段を上ってくるとそれは嘆きに変わった。「どうしよう」「一日中カラスのように声が枯れてしまう」「すっかり疲れ果ててしまう」などと。(p.78) エリコ（『ヨシュア記』に記述されたイスラエルに征服されたカナンの都市）では彼女の無事を祈ることもあったかもしれないけれど私の耳が聞こえなくなってきたとき、これらすべてが私に突きつけられたのでした。そして自問自答したことの一つは「私は彼女のように人々を逃げ惑わすのだろうか？一生そんなふうに恐れられ、嫌われるべきだろうか？」でした。確かに、その運命は耐え難いほど厳しいように思えることもありました。でも今私は墓場の縁にいて、多忙な人生を終え確信しているのです。この耳が聞こえなくなったことは、私にとってこれまで最高の出来事の一つなのだと。利己的な見方をすれば、自己を制するための最高の衝動として、そしてもっと高尚な見方をすれば、偽りの恥辱やそれに伴う言い表せないほどの悲惨さを克服する同じような刺激もなく、同じ不幸で苦しんでいる他の人々を助けるという私にとって最も特別な機会として今があるのだということなのです。

この頃には、ワーテルローの戦いは終結していました。戦争中ほとんどの子供たちは政治家になっていたと思います。私もその一人でした。ある日私が恥ずかしさを吹き飛ばし、教室を出ようとしたペリー先生を呼び止めて、私の時代に現れた一人のルイ17世の話を信じるかどうか、とても興奮した様子で尋ねた時、先生はひどく面白がっていたのを覚えています。母は第一次フランス革命を覚えていたに違いありません。彼女は王室に同情しており、かわいそうな小さな王太子はその物語を少しでも知っているすべてのイギリスの子供たちの恋愛の対象でした。彼が見つかったという話はそのたびに何千もの想像力をかき立てました。そして、それは他にも多くの素晴らしい効果をもたらしましたが、中でも、私がペリー先生に授業以外のことを話す勇気を与えてくれたのです。(p.79) 今度の戦争⁷⁾（1854年）が勃発して以来、召使いたちにニュースを伝えることに関して、40年前の自分と全く同じになっていることに気づき、私はおかしく思いました。昔は、台所に駆け込み、父の召使いたちに「ボニー」⁸⁾が捕まるのは確実だと、逃げるのは不可能だと、ウェーリントン公爵の軍隊がピレネー山脈を越えて押し戻されているとか、あるいはウェーリントンが同盟軍をあちこちで撃退したとか、いろいろと話したものでした。当時は同情を求め、ニュースを伝えることの重要性と喜びを楽しんでいました。今は夕方の郵便配達の後、自分の召使いたち

⁷⁾ クリミア戦争（1853-1856）

⁸⁾ ナポレオンのこと

を呼び寄せて、地図を持ってこさせたり、地球儀を持ってきたりして戦況を説明し最新のニュースを伝えています。おそらく、昔の記憶がいくつか頭に残っているのでしょうか、間違いなくこれらの聰明な少女たちに自由の利益への関心と、戦争におけるイギリスの立場と義務についての明確な知識を与えるという強い願いが確かにありました。父が半島のいくつかの勝利のニュースを持ってきたこと、そして所得税が10%に引き上げられたこと、そして再び所得税が廃止されたことを母に伝えたときの父の顔を覚えています。1814年の平和宣言と、私たち全員がイルミネーションを見に行ったことを覚えています。その中には、ボナパルト（常に緑のコート、白いズボン、ブーツを着用）が悪魔によって地獄に運ばれたり、同じ付き添いによって火の湖で突き刺されたり、アンギャン公に取り憑かれたりしている様子を描いた忌まわしい透明フィルムもありました。化学講義を担当していたドラモンド氏が（会計事務所から帰る途中）裏口から覗き込み、「ボニー」がエルバ島から脱出してフランスにいると母に告げた時の恐ろしい瞬間をよく覚えています。(p.80) これは、その後の暑い真夏の朝、誰か（父か兄か忘れましたが）がワーテルローの虐殺の知らせを持って飛び込んできた時のことよりも、私に強い印象を与えました。陸軍にも海軍にも親戚はおろか、私の知る限り知り合いさえいませんでしたが、私たちにとって最も重要なのは虐殺のことだったと思います。

平和が始まって1年が経った頃、平和の効果に対する失望感が私をさらに深く傷つけました。国は解散した兵士たちで溢れ、強盗と殺人事件が恐ろしく頻発し、悲惨な状況に陥っていました。救貧院委員会は貧困の圧力にさらされていましたが、もし当時の保護者たちがもっと情報に精通していたなら、到底対処できなかっただことでしょう。そして、私が抱いた政治的パニック（私は絶えずパニックに陥っていた）の一つは、救貧法によって国が破産するのではないかということでした。もう一つのパニックは革命に関するものでした。私たちが考える革命といえば、もちろん、街頭にギロチンが置かれるとか、そういう類のものでした。それはコベットが全盛だった時代であり、キャッスルレー シドマウスのスパイ組織や陰謀の時代でした。私たちの牧師は偉大なる急進派でした。そして彼は、私たちに当時の風刺画（たぶんホーンの風刺画）を見せてくれました。その風刺画では、キャッスルレーがいつもアイルランド人を鞭打ち、キャニングが怒鳴り散らし、摂政が妻を侮辱し、飢えてやつれた群衆が宮廷と大臣たちへの復讐を祈っていました。そして毎週日曜の晩餐の後、彼と二、三人の独身の友人たちが私たちと一緒にいたとき、恐ろしい革命が絶対に起るだろうという話になりました。(p.81) 1819年にブリストルから私が戻ったときに、私は私の良心が命じることや親愛なる叔母から教えられたことをあえて口にしました。一般の人々のように中傷に反論できない王室に不利な噂を広め、それを信じ込ませるのは間違っていると述べたのです。すると、最初は嘲笑の叫びに遭い、次に、王室の罪人たちを人々よりも上に見なすという不道徳さを厳しく叱責されました。

この世俗性への恐怖と、王室の罪人は他の人々よりも恵まれないという感覚、そして、まず彼らの役割、そして次に彼らの無防備な立場ゆえに彼らに敬意を示すべきだという気持ちの間で、私はアメリカ人が言うところの「窮地 (a fix)」に陥っていました。私が陥っていた良心的な不安定さは、私にとって本当に困難で悩みの種でした。そして、これがおそらく、当時の年齢ではあまり一般的

ではなかった真剣さで、政治の原則と政党の特徴に私の注意を集中させるのに役立ったのだと思います。それでも——もし当時のイギリス人は私が「平和の歴史」を書くことになるなどと予言されていたら、どれほど驚いたことでしょう！ 平和の重要な結果の一つは、中流階級の家庭に外国人が突如として関心を寄せるようになったことでした。若い世代は、外国人といえば、年老いた亡命者——おしゃれを塗ったフランス人、風変わりなポンネットとハイヒールの貴婦人——しか見たことがありませんでした。この頃、ノリッヂにある外国人がやって来て、私たちの家に不思議な関心を抱きました。私たちがいかに礼儀正しい人々で、隣人の道徳にどれほど鋭い注意を払っていたかを思うとそれは当然のことでした。その人は哀れなポリドリ (John William Polidori:1795-1821) でした。後にバイロン卿の主治医として、小説の『吸血鬼』の著者として、そして賭博の末に自殺したことで有名になった作家でした。(p.82) 私たちが彼を知った頃、彼はハンサムで、節操な若者でした。ウィリアム・テイラーが無節操な若者を拾い上げたように、ウィリアム・テイラーに拾われ、その土地が許す最高の社交界に引き入れられました。カトリック教徒、あるいはカトリック教徒のふりをしていましたため、彼は郡内の最も貴族的な邸宅のいくつかで歓迎されました。彼は愚かな、おしゃべりな男で、分別も知識も、道徳心もありませんでした。しかし私たちは、彼にないものを当然のことだと考え、彼が持っているものは何でも尊敬していました。一方、彼は私たちの長姉（しかし姉はうまく離れて逃げました）を公然と崇拜しており、いつも私たちの家にいました。私たち若い者は、彼に驚くほど夢中になり、手紙の裏に彼の素晴らしい横顔を描き、彼の夢を見、彼の素晴らしい話に耳を傾け、スタッフォード卿の公園で彼が馬車を木にぶつけた脳震盪を起こした時には、慰めようもなく悲しんでいました。もし彼が（幸いにも）あの時亡くなっていたら、彼は私たちの想像の中で英雄として生き続けていたでしょう。その後の数年間（おそらくあの脳震盪のせいでさらに荒れ狂った時期だと思う）は、誰もが彼から良いことを得られるという期待を捨て去りました。しかし、賭博の借金に耽溺し、正気を失った彼が亡くなったとき、その衝撃は大きく、少なくとも私の心には深く消えない印象を残しました。当時、幸せな家庭を持っていた一番上の姉はショックを受け心配していましたが、私たち妹のほうがはるかに深く衝撃を感じていました。当時、私は宗教的狂信の極みにありました。そして彼の魂のために祈るという安らぎのために自分がしていることの神学的妥当性についての疑いをすべて捨て去ったことを覚えています。一日に何度も、私たちは心を込めて、彼の冥福を祈りました。

セクション III

第三節

前にも述べたように、16歳の時に家を追い出されたのは、私の健康と気性のせいでした。あまりにも多くの不幸の原因が重なり、私の気性はひどく不安定で、他に効果的なことを何もできなかつたのだと思います。すべてが私にとって苦痛で、それゆえ私は不機嫌に振る舞いました。そのため家庭内での批判癖が生じてしまいました。それは家族の誰に対しても、ましてや一番年下で誰よりも苦しんでいる小さな子供に対しては決して許されるべきではありませんでした。母は時折、小切手を受け取り使っていましたが、それは当面は役に立ったものの、家族の習慣は根強く全面的な改

革を行うのは賢明な策でした。克服しなければならなかったことを知るには、二、三の逸話で十分でしょう。

私は内気だったので、何かを教えてほしいと頼むことは決してありませんでした。もちろん、親切な見知らぬ人から教えることは別ですが。先ほども述べたように、私たちは家事全般には慣っていました。裁縫、アイロンがけ、お菓子やジンジャーブレッド、ペストリー作り、家中の秩序を保つことはできました。(p.84) しかし、食料の買い方や食卓の用意の仕方、肉屋や魚屋とのやり取りの仕方など、教えられなければ誰も知り得ないことを私は知りませんでした。これが長年私にとってどれほどの悩みであったかは、想像もできません。私は常に、目の前に迫る山のような義務に怯え、母が家を出たら、あるいは私が結婚したら、自分はどうなるのだろうと考えていました。しかし母のところへ行って教えを乞おうなどとは、一度も思いつきませんでした。そして、私を無力にしていたのは、プライドではなく恐怖でした。私は家事仕事が好きで、そういう風にできることをすることに大きな喜びを感じていました。そのため、時には自分はF将軍が妻と呼んだ「甘やかされた良い女中」であると感じることもありました。20年後に書いた私の著書「奉仕の手引き」("The Maid-of-all-work," "Housemaid," "Lady's Maid," and "Dress maker,") にはこのことが少し表れているかもしれません。一方、私ほど家庭内の視線が私に向けられている時ほどひどく不器用な人間はいませんでした。そして、このことが私を家族の中で最も厄介な一員にしていました。一度、湿った砂糖の入った鉢をジブレットパイ（とり肉のミートパイ）の中にひっくり返してしまったのを覚えています。(これほどひどいことは他に覚えていません。) 自分で欲しいものは何でも暗闇の中で手に入れるのに、頼まれたものは何も見つけることができませんでした。ある時、ある女工が私たちの間で喪に服していたとき、私は鍵を持ってある引き出しから目印のためのネクタイ一式を持ってくるように言われました。その命令に私は気が沈み、すでに避けられない言葉が耳に響きました。「私は価値に見合わないほど面倒な人間だ」と。私は心からそう信じていました。引き出しは大きく、ぎっしり詰まっていました。物同士の見分けがつかず、ネクタイ（クラバット）はどこにも見えませんでした。(p.85) 私はゆっくりと、そして恐る恐る、そのことを伝えに戻りました。もちろん、私はまた頼まれ、もうネクタイなしでは戻りたくありませんでした。その時も、その次の時も私は引き出しからすべてのものを取り出しましたが、それでもネクタイは見つかりませんでした。次に長姉が試みましたが、彼女が落胆して戻ってきてネクタイが見つからなかったとき、私は大きな慰めを得ました。母は全部自分でやらなければならないという苦痛を痛感し鍵をひたくりました。レイチェルが別の場所に置いたのではないかと提案し、結局違う場所で見つかりました。そして母がほんの数言の高潔な言葉で私の感情の流れを完全に変えたとき、私の心は復讐心と喜びでいっぱいになりました。

女工の前で、彼女は私の腕に手を置き、キスをして、「ごめんなさいね」と言いました。私はただ涙を流すだけでした。しかし、その言葉はその後もずっと私を支えてくれました。私はまた別の場面を思い返してみると、自分の大胆さに恐怖を感じ、家族が私を我慢できたのかどうか不思議に思います。ペリー先生のところに、利発でいたずら好きな女の子がいました。とても利発で、私よりずっと年上だったので、彼女が権力を振るおうとすると私には大きな影響力がありました。もつ

とも、私は彼女のやり方を心から非難していました。ある日、彼女は部屋の隅で、不思議な口調で私に尋ねました。「レイチェルが家で一番のお気に入りで、明らかに偏愛されているのに気づいてないの？」と。彼女は言いました。「みんなもそれに気づいているわよ」と。これは私にははつきりとは思い浮かびませんでした。レイチェルは便利で役立ち、私のように恐怖に怯えることもありませんでした。そして、当然のことながら、多忙な母はレイチェルに助けを求める、仕事のことなら何でも彼女に頼るようになりました。(p.86) 年上の子たちがするように、レイチェルにも同じように私を問い合わせたり、冷たくあしらったりする癖がついていることに私は気づかなかったのです。同級生のこのいたずらな発言の日から、私は用心深く見守っていましたが、嫉妬深い者の常套句通りの結果になりました。誰にも言わずにこのことを思い悩んでいるうちに、何ヶ月も、いや、もしかしたら1、2年が過ぎました。そして、ある冬の夕方、お茶を飲んだ後、一番上の姉が留守で、母とレイチェルと私が仕事をしていた時に、突然感情の爆発が起こりました。レイチェルは私の言ったことを批判しましたが、たまたま私の言う通りでした。一度弁明した後私は黙って座っていました。母は私の「頑固さ」を指摘し「少しも納得していない」と言いました。私は、納得できるようなことは何も言わていないと答えました。母はレイチェルに賛成だから譲るべきだと言い放ちました。ところが、私は境界線を越えたところで、道を間違えてしまった。突然、大胆な衝動が頭に浮かび、私はできる限り挑発的な口調で、これは何ら新しいことではない、母はいつもレイチェルに賛成して私に反対するのだから、と言った。母は仕事の手を置いてどういう意味かと尋ねた。私は母の顔を真っ直ぐ見て、レイチェルの言うことやすることはすべて正しく、私の言うことやすることはすべて間違っているという意味だと答えました。レイチェルは侮辱するような笑い声をあげたが、母から「静かにしなさい」と鋭く叱られました。これで私は自分がいくらか優位に立ったことがわかりました。そして、母が私に音楽の練習をするように厳しく求めたことで、そのことがさらに明らかになりました。母が時間を稼ぎたいのだとわかったからです。問題は、どうやって乗り越えるかでした。私の手は汗ばんで震え、指がくっついていて、目はぼんやりとして、耳鳴りがしました。気を失いそうでした。気を失ったとしても、何も問題はなかったかもしれません。しかし、私は平静を装うために必死に努力しました。(p.87) ピアノを開け、落ち着いた手でろうそくに火を灯し、弾き始めると、最初の和音から力強さが生まれました。人生でこれほどうまく弾けたことはなかったと思います。さて、問題は…どうやって止めればいいのか？ 私には途方もない時間のように思えたが、私は弾き続けました。母が厳しく「もう止めて寝なさい」と叫んだのでろうそくを手に、私は「おやすみなさい」と言いました。母は演奏を中断させ、「ハリエット、今夜はあなたの人生で一番不愉快な思いをしているのよ」と言いました。私は「構わない。もう言い尽くしたし、すべて真実よ」と思いました。「お祈りをしなさい」と母は続けました。「今夜の行いを神に赦していただくよう祈りなさい。できるかどうかわからないけれど祈りなさい。」私は思いました。「いや、祈らない」そして私はそうしませんでした。そして、幼少期から成人期にかけて、私が祈らなかつた唯一の夜でした。私は母の強引な態度に不安を感じ取り、勝利したのです。たとえ正義が私の側にあるとしても（私は完全にそう信じていた）、力は彼女の側にある。そして、翌朝がどうなるのか、私には想像もできませんでした。私はほとんど眠れず、恐怖で吐き気を催しました。

しかしその時も、そしてその後も前夜の出来事については一言も語られませんでした。だがそれ以来、レイチェルと私は、極めて厳格に公平な立場を保ってきたーもしこの機会をもっと有効に活用していたら、母が私にこう言ってくれていたらよかったのにと思います。「わが子よ、あなたの心にそんな恐ろしい考えがあったとは夢にも思わなかったわ。私はあなたの母親よ。なぜあなたを不幸にしていることを全部私に話してくれないの？」と。そうすれば何年もかけて目立たないように沈黙の中で効果を発揮したであろう治癒が、一瞬のうちに実現しただろうと私は信じています。

(p.88) 生涯を通じて私の悩みの種は、他人の些細な事実に対する間違いといった問題に対して誠実さと平和と礼儀正しさをどう両立させるかということでした（そしてそれが悩みであるということは、私の中に根深い欠点があることを示しているのです）。私が言いたいことの一つの例をあげると、学校の同級生がShakspereと綴りました。するとペリー先生は、その名前は印刷物ではaなしでは綴られないと指摘し、aを付けました。私はあえてこれを疑ってみましたが、先生はその主張を繰り返しました。午後の学校で、家にある版の巻を彼に見せたところ、彼の誤りが証明されました。彼はその訂正を全く冷淡に受け止めたので、私は自分のしたことが正しかったのか間違っていたのか、誠実であるために生徒たちの前で先生の言葉を正す必要があったのか戸惑いました。もちろん、もっと年上だったらもっと内密にそうしていたでしょう。しかし、これは私がそれ以来ずっと苦労してきた、あの階級関係の難しさのよい例です。家族の習慣で私に返事を要求し、無条件に譲歩しないと頑固者呼ばわりされるせいで、困難はますます大きくなっていました。私はいつも善良な人々が老人や病人、弱者、そして時には周囲の人々が、いかに容易にうまく相手に合わせ、うまく対処しているかを見て驚嘆してきました。私には決してそんなことはできませんでした。なぜなら私がその弱さゆえに、その瞬間にこれまで以上に尊敬している人々に対する、軽蔑的な扱いのように思えたからです。しかし私は常に正反対の極端にいました。あまりにも厳肅で、あまりにも頑固で、違いを誇張し同時に頑固になりました。実際、40歳近くになって初めて、物事が本当はどうあるべきか、(p.89) つまり、すべての人に対するそれぞれの要求に応じて、絶対的な誠実さと、可能な限りの明るさ、優しさ、謙虚さ、そして敬意を完璧に組み合わせることによって、物事がどうあるべきかをやっと理解したのでした。私は今日まで正しい礼儀作法を身につけたことはありませんが、J.S.の人格と礼儀作法の美しさが、驚くべき試練の状況下で私に示されて以来、それが何であるかを理解しました。

正直で、抑圧された能力を持つ人に付きまとう誇張を除けば、概して私は正直であったように思います (p.90) が、ここで（私の人生のこの部分に属することですが）、ある人に対しては、恐怖心から習慣的に嘘をついていたことを述べざるを得ません。子供の頃、母に対しては、私を最も簡単に乗り越えさせてくれるものなら何でも主張したり否定したりしていました。羽子板遊びなど、様々な無害なことを否定したのを覚えています。そして、しばしば明白な理由もなく否定しました。そして、これはもっぱら一人の人に対してだったので、諫めや罰はありましたが、家族の中で嘘つきと見なされたことは一度もなかったと思います。今ではすべてがとても奇妙に思えますが、それは一時的な、ごく短い期間でした。家を出ると、嘘をつく誘惑はすべてなくなり、それ以降は誇張と強い表現の癖と闘う以外に何もなくなりました。ブリストルへ行く前、私は三つの悲しみに悩ま

されていました。数ある悲しみの中でも特に際立っており、それを書きながら思わず笑ってしまいます。それは、私の字が汚いこと、耳が遠いこと、そして髪の毛の状態です。なんと悲惨な三つもの悩みなのでしょう！家族の中で、私が初めて字が書けなくなったのです。そして、なぜそうなったのかは、未だに説明できません。確かに一生懸命努力したつもりでした。でも20歳を過ぎるまでは、下品で窮屈で、だらしない走り書きばかりだったのです——それは執筆活動によって文章の作法を忘れ、筆が自由に使えるようになるまで続きました。その後は植字工たちからまず読みやすさを、そしてやがて他の才能を褒められるなど、なかなかの成果を上げました。しかし、それが続いている間は、大変な屈辱でした。そして、ぎこちない筆致が呼び起こす思いに、幾度となく苦い涙を流しました。ristolから故郷に手紙を書くのは、私にとって恐ろしく苦行でした。そして、それを書く曜日は、ベックウィズの音楽教室に通う日々とそっくりだったのです。もし当時、生涯でどれだけの紙を綴らなければならぬかを誰かに告げられていたら、人生は煉獄のように感じたでしょう——難聽については、ristolでは何の救いにもならなりませんでした。体調を崩して帰宅したときには難聽はさらに悪化しました。——そして私を本当にひどく悩ませていた三つ目の苦しみは、家を出てすぐに治りました。私はあらゆる事柄において、愛するケンティッシュおばさんを信頼していました。もちろん、これも他の事柄の中でも特に叔母は私を、驚くほど美しい髪を持つ彼女の友人に相談するように勧めました。すると、私が櫛で梳かしすぎていたことが分かり、ブラッシングするだけで満足すれば髪に問題はないことがわかりました。こうして悲しみは消え去り「人間らしさの総体」となる些細なことの一つが終わりを迎えたのです。

そして今、初めて、恐れのない人間に出会う時が近づいていた。その祝福された存在とは、愛する叔母のケンティッシュおばさんでした。彼女は、私がこれまで知り合ったどの人物とも一線を画すような特別な存在でした。家を出てから数ヶ月経つまで、自分がなぜ家を出たのか、その真相は分かりませんでした。(p.91) そして実際に家を出た時、母が私の気持ちを気遣ってくれていたことに深く感動しました。私たちはどういうわけか寄宿学校をひどく軽蔑するように育てられていました。ですから、1817年の春、母がヤーマスにあるミス・サムシング・スクールに1、2年通わなかいかと私に持ちかけたときは、本当に驚きました。母は海のこと、変化の楽しさ、そして私たちの知り合いのL.T.という、とても楽しい女の子がそこでどれほど幸せそうにしているかなどについて話してくれました。しかし、私はL.T.のことや彼女の勉強のこと、そして噂に聞いていた若い女性たちの成績のことをすっかり馬鹿にしていたので、母は絶対にうまくいかないと計画を諦めてしまいました。あの危機的状況で私を愚かで無知な人たちの中に送り込み、ごく普通の寄宿学校風に「礼儀作法」を身につけさせようとしたら、私のような気質の人間にとっては破滅だったでしょう。母は私を私より優れた人々の中に送り出し、道徳的にも知的にも向上させてくれたのでした。ただし、健康面ではその試みは失敗に終わりましたが。母の兄がristolで事業に失敗し、健康を害して事業を再建することができなかったのでした。その有能で学識のある妻と、聰明な若い娘たちが学校を開きました。娘たちのうちの一人は私と年齢が数週間しか違わなかったのです。そして私たちは当時（1818年の初め）から今に至るまで親しい友人となったのです。もう一人は二歳年下、もう一人は二歳年上で、長女は成人していました。これらの聰明な従姉妹たちについて

は、長年直接会わなくても、よく話を聞いていました。1818年の年明けに、叔母から母に手紙が届いたのです。そこには、若い人たちが知り合う時期が来たこと、叔母の娘たちは皆学校で忙しくしているが、レイチェルは学校の授業には少々年を取りすぎていること、などが書かれていました。(p.92) しかし、ハリエットがそこに行きしばらく一緒に過ごし、学校の管理をしてくれるなら、彼女は歓迎される客になるだろう、などと書かれています。これは私にとって大変喜ばしいことでした。そして、父が次にブリストルへ旅立つとき、私も一緒に行くことになると聞き、とても嬉しく思いました。2月初旬。私は数週間の滞在を考えていたため、母が私の不在は1年以上続くかもしれませんと言ったときは、かなり驚きました。寄宿学校に行くなどとは、全く思いもよりませんでした。そして、ずっと後になって、ブリストルの家族が私が寄宿学校に行くことを理解していたことを知ったとき、私は（かつては怒っていたかもしれません）騙されて行くことになったことに腹を立てるのはなく、そのような対応を必要とした私の気質を深く反省し、母が私のくだらないプライドを傷つけず、厄介な感情を気遣ってくれたことに心を打たれました。ブリストルで過ごした15ヶ月間は、全体的には幸せでしたが、後半の半分はホームシックに悩まされました。故郷への愛は、抑圧され、ためらっていた分だけ、より強くなったように思います。確かに、別れたその瞬間から、私は家族一人ひとりを情熱的に愛していました。彼らからの手紙が届く日が来ると、私は期待で体調を崩しそうでした。何か悪いことが起きるかもしれないという不安と、当時手紙を受け取る時の心臓の鼓動と涙で目がいっぱいだったため、届いた手紙はほとんど読めませんでした。その頃、家族の心配事もいくつかありました。そして一つ大きな出来事がありました。(p.93) 長姉の婚約です。私が家に帰る頃には、姉は事実上私たちとは別人になっていました。いとこたちは、私が予想していた以上に驚くほど賢く、私が知識とそれを獲得する力において著しく劣っていることに、彼女たちは少なからず驚いたに違いありません。今でも、彼女たちの家族ほど知識の獲得力、あるいは知識の有効活用力に長けている家族に出会ったことがないと思っています。彼女たちは、思いがけない時間に新しい言語を覚えたり、交代で中庭に出て深呼吸をしながら難しい哲学書を読み通したり、講義や説教を一言も聞き逃さずに書き写したりしていました。コンサートの後、ピアノの周りに集まり、演奏された新しい曲に合わせて弾き語りをするのです。このような才能は私にとって目新しい光景でした。そして、純粋な賞賛という純粋な喜びを与えてくれました。というのも、当時の私は確かに才能など意識していなかったからです。学校では特にやることがなく、一人を除いて全員より年上でした。そして、私が参加したクラスでは、特に評価されたわけでもなかったと思います。第一に、私の難聴は、今では不利になるほどひどいものでした。しかし、いつも自分の思い通りに動いてくれる私の記憶力が、他の面では期待に応えられなかつたことが、さらに悪い不利な点でした。私は自分のやり方で習ったことは何でも覚えていましたが、ずっと年下の少女たちのように、授業中に伝えられたことに全く答えることができませんでした。この重要な時期における私の知性の向上は、主に独学によるものでした。私は論理学と修辞学に関する分析的な書物を何冊か読み、非常に満足感を覚えました。そして、この方法で得たものは、その後何も失うことはありませんでした。私は歴史もたくさん読み、詩にも熱中しました。いとこたちが私に新しい世界を開いてくれたのです。(p.94) ブリストル周辺の美しい景色のおかげで、自然の景色への愛が

私の中に大きく芽生えました。ある出来事から、つい最近になって、この愛に目覚めたのはむしろ突然だったように思います。もっとも、クロマーの海への愛は数年前からありました。ペリー先生が私たちに『ラ・アレグロ』と『イル・ペンセローソ』を朗読させようとしたのですが、全くうまくいきませんでした。私は何も感じませんでしたが、聞いた内容は理解できたと思っていました。彼が去って間もなく、ある日、子供部屋で両方の作品を読みました。すると、まるで新しい感覚を得たかのように、たちまち夢中になりました。今回も、平坦で荒涼としたノーフォークからブリストル周辺の美しい景色へと移った時も、同じようなことが起こりました。ログウッド・ミルズ沿いの散歩道のささやかな美しささえも、私にとっては魅力的でした。澄んだ水の流れと雑草の生い茂る水路、そして川岸の牧草地の小道。そしてリーウッズ、キングスウェストン、ダウンズあたりでの私の陶酔感は限りなく大きなものでした。しかし、それよりはるかに重要なのは、この頃、愛する叔母ケンティッシュおばさんや、当時私を取り囲んでいた他のすべての親族の、率直で溢れんばかりの優しさによって、私の中に優しい感情が芽生えていったことでした。私の心は温かくなり、開かれ、いつもの恐怖は消え去り始めたのです。その後聞いた話では、私が到着した日、女生徒の何人かが従妹の M に（私がいた居間から出てきたとき）私の様子を尋ねたところ、彼女は「私は怒っているように見えるがそうではないと分かっている。そして私は不幸そうに見える」と言ったそうです。ブリストルを去ったとき、私は幽霊のように青白く、限りなく痩せ細り、相変わらず眉をひそめ、不快な顔をしていました。（p.95）しかし、比較的オープンな表情をしていました。愛するケンティッシュおばさんのそれとは対照的に、同時に私を非常に強く襲ったのが、臆病な迷信でした。叔母自身は、当時も今も非常に信心深い人だったので、自分の宗教によって好きなことを何でも暗示し、容認するという驚くべき才能を持っていました。そして、純粋で、愛想がよく、利己的でなく、汚さないものを好んだので、この傾向は彼女に何の害も与えませんでした。私の場合はそうではなかった。私の宗教もまた、私の心の性格を帯び、それに応じて厳しく、厳格で、悲しげなものとなりました。当時、ブリストルのユニテリアン教会では、最近牧師になったカーベンター博士をめぐって大騒ぎっていました。彼は非常に献身的な牧師であり、非常に熱心な敬虔主義者でした。でも知識は表面的で、能力は乏しく、観念は狭く、気質は完全に聖職者のような人物でもありました。彼はまさに、民衆（特に若者）から崇拜され、その崇拜に甘やかされる異端の牧師でした。彼は若者から崇拜され、中でも私ほど崇拜していた者はいませんでした。弟子たちが若いうちは彼の権力は際限がありませんでした。しかし、彼の指導と生徒たちはキリスト教の本質的な教義によって結ばれていたため、単なる個人的な影響力が薄れるとすぐにすべてが崩壊しました。弟子たちが成人した頃ほど、宗教的見解の多様性は他に類を見ることはありませんでした。彼らはカトリックと無神論の両極端、そしてその中間のあらゆる立場にいました。彼の敬虔で献身的な洗礼志願生であった私は、ひどく迷信深くなり、宗教に完全に身を捧げ、宗教のために生き、熱狂的になりました。（p.96）私は牧師であり先生であったあの人のことを熱く語りながら家に帰り、彼が話してくれた一言一句を思い出しました。彼の教えは、まるで私の心と良心に焼き付いているかのように、忌まわしいほどの精神的な硬直性と、真に立派な良心の力が奇妙に混ざり合い、家族からは同じように奇妙に混ざり合った嘲笑と尊敬の視線が私に向けられました。当時、

母の膝の上で椅子に座って縫い物を習っていた妹は、子供らしい鋭い目と心で、私が感じたことを私に話してくれました。私が部屋を離れるたびに、母と姉たちは私の狂信的な態度を問い合わせ始めました。それは確かにかなり疑問視されるものでしたが、妹は嘲笑の裏に私への一種の敬意を見出し、それが彼女に初めて明確な道徳的義務感と、それに従うことの本質を与えたのです。ブリストルの実験の結果は、このように総じて良好でした。私の健康は、神経の消耗、ホームシック、宗教的な感情、過度の勉強（叔母は私の信念に反してそう言った）、そして医療ミスのために、良くなるどころかむしろ悪化していました。私は多くのことを学び、さらに学ぶための良い方法を身につけていました。家庭的な愛情は再生し、心から真剣に信仰深くなり、その結果、気質もいくらか改善され、勇気、希望、そして誠実さも少なからず向上しました。狂信は、牧師が誰であろうと、おそらく私がいざれにせよ通過しなければならなかった段階だったと思います。そして、牧師崇拜も同様だったと思います。

(1818年まで)

